

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 ジンバブエ祭祀音楽の政治・宗教構造

氏 名 松平勇二

論 文 内 容 の 要 旨

目的

アフリカは数多くの天才的ミュージシャンを輩出した。たとえば、西アフリカの内陸国マリの出身でアルピノの歌手サリフ・ケイタ。反アパルトヘイト活動で国外追放となりながらも、音楽活動を続けた南アフリカの女性歌手ミリアム・マケバ。

彼ら彼女らは、いずれも差別や圧制との戦いの中で歌いながら、その音楽で世界に衝撃を与えた。

彼ら彼女らの音楽が、音楽としても世界中を感動させ、社会を動かすまでの力を持ちえたのはなぜだろうか。

本来アフリカのほとんどの地域は文字をもたない無文字社会であった。これらの地域で文字に変わる情報伝達手段として発達したのが、歌や器楽などの音の文化であった。しかも、音楽は、アフリカ社会での冠婚葬祭や通過儀礼などの宗教文化に、不可欠な要素だ。アフリカ各地の音楽は政治的にも宗教的にも重要な役割を果たしてきた。アフリカのポピュラー音楽にはただの娯楽以上の意味がある。

アフリカ南部の内陸国ジンバブエでは、「ンビラ」（いわゆる親指ピアノ）が古くから演奏されてきた。そしてこの楽器の音楽を用いたポピュラー音楽が、ジンバブエ解放闘争を支えた。

ジンバブエは19世紀末にイギリスによって植民地化され、そこから約90年間にわたって人種差別政策がしかれた。1966年に黒人解放闘争が始まり、1980年に黒人多数派支配のジンバブエ共和国が誕生した。15年にわたる解放闘争期に誕生したポピュラー音楽が「チムレンガ・ミュージック」（闘争音楽）であった。闘争音楽の創始者であるショナ族出身歌手のトーマス・マプファーモは、ンビラなどショナの祭祀音楽を用いて、人種主義政府を糾弾する数々の歌をつくり、歌った。マプファーモはジンバブエ解放闘争を支えた英雄の一人として、現在もジンバブエ国民の尊敬を集めている。

チムレンガ・ミュージックは、ンビラというジンバブエの民族楽器が用いられたこ

とによっても、国際的注目をあびることになった。ンビラとは木製の共鳴板に金属製鍵盤が取り付けられた楽器である。鍵盤が指で演奏されることから、日本では「親指ピアノ」という名前で知られている。ショナ族は自然災害や武力衝突などの危機が訪れたとき、宗教儀礼を開催してンビラを演奏する。人々はンビラの音楽に合わせて踊り、歌い、祈り、そして危機解決に向けて議論をおこなう。ンビラは社会の危機や自然の災害に際してひらかれる宗教儀礼で演奏される祭祀楽器である。したがって、ンビラ音楽をモチーフにしたマプフーモの音楽も、その根は宗教的基盤に根ざした音楽であるといえる。ただしマプフーモの音楽が直面していたのは、村落共同体レベルの危機ではなく、ジンバブエ国民全体が直面していた民族的な危機であった。

構成

本論文ではジンバブエ解放闘争という国家の危機的状況の中で黒人民衆の心の支えとなったトーマス・マプフーモの音楽、そしてその音楽の背景にある基層宗教文化の分析によって、祭祀音楽、政治、宗教の複合構造を論じた。

本論文は、第一部：ジンバブエの自然歴史環境、第二部：ショナ音楽の政治人類学、第三部：ショナ音楽の宗教人類学、の全三部で構成される。

第一部では、ジンバブエの自然環境とイギリスによるジンバブエ植民地化の過程を整理した。ジンバブエでは10世紀頃から国家が栄えた。しかし、アフリカ人国家はイギリスによって19世紀末に滅ぼされ、そこから約90年間にわたる人種主義体制が敷かれた。

第二部では、ジンバブエ解放闘争とトーマス・マプフーモのチムレンガ・ミュージックを分析した。第4章ではジンバブエ解放闘争の開始からジンバブエ独立にいたる経緯を整理した。第5章では、黒人解放軍が民衆の教育と情報伝達のために利用した解放軍歌を分析した。そして第6章ではトーマス・マプフーモの歌詞分析から、近代ジンバブエ史におけるショナ音楽の政治的側面を考察した。

第三部では、ポピュラー音楽の基層にあるショナの宗教文化を分析した。第7章では調査地となったセケ郡南部の社会構造を分析した。第8章では、セケ郡南部の祭祀音楽について、娯楽の歌ジティ、祭祀歌謡ンゴンド、祭祀楽器ンビラの3つの音楽の演奏方法と歌詞を分析した。第9章ではショナの伝統的な霊信仰について霊の階層構造と儀礼分析をおこなった。

ジンバブエ音楽の政治・宗教構造

これらの分析によって明らかになったことは次の三点にまとめられる。

1. 近代ジンバブエ政治史における闘争歌の政治性と宗教性

第一に、ジンバブエの近代政治史において、音楽が非常に大きな政治的影響力を持ったということである。ジンバブエアフリカ人は、約 90 年にわたり、少数ヨーロッパ人主導の人種差別政府によって支配された。1960 年代にアフリカ人解放軍が独立闘争を開始する。その闘争を力づけ鼓舞するとともに、一般民衆に独立闘争の意義をかたりつたえたのが、アフリカ人解放軍の解放歌とショナ族歌手トーマス・マプフーモの闘争音楽であった。

また、ショナの独立闘争の歴史をしらべてゆくなかで、独立闘争の英雄とされているのが、植民地軍に対して兵をひきいて戦い、とらえられ処刑された霊媒師であることもあきらかになった。霊媒師が極めて政治的な役割をになっていたのである。解放歌のなかでもこれらの霊媒師が英雄として讃えられた。

2. 祭祀音楽としてのチムレンガ・ミュージック

第二に明らかになったことは、音楽がジンバブエの解放を支えるほどの力をもった、その力の源泉にショナの伝統音楽があったことである。マプフーモはショナの祭祀音楽を用いて、ローデシア政府の人種差別政策を糾弾していた。ショナの祭祀音楽とは、親指ピアノ「ンビラ」の音楽である。ンビラはショナ族の基層宗教文化に直結する楽器であった。ショナ族の基層宗教文化とは、霊媒師を中心とする儀礼文化であり、そこに祭祀音楽、宗教、政治の一体性があった。

3. ショナ儀礼文化における音楽、政治、宗教の一体性

儀礼文化の音楽-政治-宗教の一体性とはなになのか。第三に明らかになったことは、霊媒師が地域社会の政治的、宗教的中心人物としての役割を担っていることである。ショナの儀礼では、ンビラの演奏とともに、霊による霊媒師の憑依がおこる。霊媒師は人々のあらゆる困難の救済者である。霊媒師は雨乞いを起こす宗教的指導者であり、地域社会の呪術裁判や紛争調停をおこなう政治的中心人物でもある。

ニヤンドーロ氏族が崇拝する天空霊ビリナガニレとその霊が憑依する女性霊媒師は地域社会における政治的中心であり、宗教的中心でもあった。ビリナガニレ霊の神殿があるマササ村には儀礼組織が結成され、その組織を中心に地域社会の問題解決（雨乞いや呪術問題）について議論がおこなわれた。

ショナの人々にとって霊媒師はあらゆる危機からの救済者である。したがって、霊媒師には雨乞いなどの神秘的能力を用いた宗教的役割だけでなく、政治的な役割が与えられる。ビリナガニレ霊の女性霊媒師が開催する儀礼では、祈りなどのあらゆる儀礼的行為の背景でンビラが演奏された。ンビラは非日常的な空間を作り出す音楽であり、この音楽があつて初めて霊媒師と人間による議論がおこなわれる。

村落レベルの問題に対する伝統的な解決は、祭祀音楽によって作り出された非日常

空間における議論によっておこなわれた。祭祀音楽なしに非日常空間を作り出すことはできず、したがって、議論も問題解決もおこなえない。また、危機的問題（政治的問題）なくして憑依儀礼の開催はない。したがって儀礼がなければ祭祀音楽も演奏されない。

祭祀音楽、宗教、政治の一体性は地域レベルの危機をこえた、民族的あるいは国家的危機においてもあらわれた。1960年代に始まったジンバブエ解放闘争は国家的危機に置いてあらわれた、祭祀音楽、宗教、政治の一体性を示す事例であった。解放歌やマプフーモの音楽は政治的であると同時に宗教的でもあった。歌は民衆に解放闘争の意義を伝える手段であるとともに、霊媒師の賞賛でもあった。シヨナ族の儀礼文化における音楽-政治-宗教の一体性は、現代ジンバブエ社会の基層をなしており、社会に危機的状況が訪れば、それが一体となってあらわれる。